NO １７５　　２０２２年2月１４日

１学年だより

夢の宅配便

１年学年主任
水野　喜代治

時　代

時代によって、人々の価値観や物事のとらえ方は変化してきます。私は昭和生まれで、いつの間にか平成、令和と時代は移り変わりました。令和の時代を生きてる中で、昭和という時代の考え方や生き方が今の時代とは異なると感じる場面がたくさんあります。学校を見ても、昭和の時代は、先生が生徒を指導するときに平手で頬をなぐったり（ピンタ）、握りこぶしで頭をたたいたり（げんこつ）、をすることは日常茶飯事でした。「愛のムチ」とも呼ばれたこの指導は、当時の生徒を恐怖のどん底に落とし入れるものでした。職員室は、緊張する空間で余程の用事がない限り生徒が出入りすることはなかったです。私は昭和の時代に生徒と教師という両方の立場を経験しました。生徒としては、いたずらな私は、当然「愛のムチ」をサンドバッグのように日々受けました。教師になってからは、職員室内に「愛のムチをして一人前の教師」というような雰囲気もあって、げんこつをする女性の先生もいました。時代の雰囲気が「愛のムチ」を重要な指導として位置づけていました。

昭和は、働くという価値観も今とは異なっていました。昭和は就職したら定年までその会社で働くことが一般的で、終身雇用と呼ばれていました。就職して途中で転職する人は、あまりいなくて、何回も転職を繰り返すと「地に足がついていない。」などと言われて批判的にみられることも多かったです。令和の今は、自分の力を発揮できる場所を探して転職するのは普通のこととなりました。このように、学校も職場も様々な場面で、昭和と令和では価値観や物の考え方が違ってきました。

今、北京オリンピックが開催されています。先の東京オリンピックの時から感じたのですが、オリンピックに参加しているアスリートの気持ちや、それを観戦している世界の人々の感覚が昭和とは異なってきているなと思いました。昭和のオリンピックは他国と金メダルの獲得数を比較して、あの国よりは上だとか下だとかを話題にすることが多かったと思います。アスリートは国家の代表選手であり「国を背負って戦っている。」という感覚が強かったと思います。

裏に続く

１９６４年の東京オリンピックのマラソン大会で銅メダルを獲得した円谷（つぶらや）選手は、インタビューで「金メダルを獲得したアベベ選手を次回のメキシコオリンピックで破る。」ことを公言します。銅メダル保持で、一躍国民の注目を浴びた円谷選手は国民の期待を一身に受けて練習に励みます。しかし、腰を悪くし、アキレス腱も痛めるなどして思うように自己記録を伸ばすことができませんでした。円谷選手は、オリンピックに勝たなければならないという重圧にだんだん押しつぶされていきます。そして、メキシコオリンピックの開催直前に自殺してしまいます。オリンピックに参加する選手には、国の代表としての重圧がとても大きくのしかかることがわかります。

２月１１日（金）、北京オリンピックで平野歩夢選手がハーフパイプで金メダルに輝きました。平野選手の演技が終わると、ライバルのショーン・ホワイト選手らが高い技術の演技に対して歩夢選手に握手を求めてたたえていました。勝ち負けもありますが、お互いのパフォーマンスに対して敬意をもって競技している選手たちの感覚が素敵だなと思いました。歩夢選手のインタビューも自分の納得した演技ができたことと、ライバル選手の演技をたたえるコメントをしていました。「日本に金メダルが取れてよかった。」とかそのような発言はなかったです。ただ、「歩夢選手は新潟県の誇りです。」という視聴者からのコメントが紹介されました。「新潟県の誇り」とかそういう考え方は、昭和の考え方だなとふと思いました。歩夢選手が万が一何か不祥事を起こしたりすると「新潟県の恥」と次は言うのかなと思いました。このように、日本とか新潟県とかに個人を帰属させるくくり方が昭和なんだなと思いました。今月の２０日まで、北京オリンピックは開催されます。アスリートには、自分の技量を精一杯出し切ってほしいと思います。結果でなくアスリートの演技で私たちはたくさんの感動とエネルギーをもらえます。「メダルが取れなくて、申し訳ございませんでした。」と涙を流して国民に謝るような昭和のインタビューが復活しないように祈ってます。